

牧師室から(2023.6.11)

前回の続きであるが、30年ほど前に、在籍していた教会に高浪先生がお話をしに来てくださったことがあった。そのついでに聖歌隊の指導をして頂いたのだが、当時その教会の聖歌隊が練習していたのは、パレストリーナの『鹿の谷川の水をあえぎ求めるように』であった。先生は開口一番、「こちらではパレストリーナをやっているのですか」と驚いたようであった。

パレストリーナはご存じの方が多と思うが、対抗宗教改革時代のカトリックの作曲家であり、ある面ポリフォニック(多声的)な声楽曲の頂点の一つであったともいえる。とにかくアカペラで歌うのはとても難しい曲が多い。

勿論、後のJ.S.バッハなどもポリフォニックな作曲者としてみられているが、彼はルター派の領邦にいた折には、礼拝にも結構多声の曲を作っていたようだが、改革派の領邦にいた際には、カルヴァン自身が、礼拝における音楽が美しく誘惑するような多声の曲であることを禁じていたので、バッハもその当時には礼拝にはそのような曲を用いることは避けていたようである。しかしバッハ以前の先達もそうだが(例えばスウェーリングなど)、礼拝でそのようなポリフォニックな曲を十分に使うことができないので、それを補うかのように礼拝が終わった後に音楽を楽しむために演奏会を行ったようである。それが例えばブクステフーデによる『アーベント ムジーク』(夕べの音楽)のようなものであったと言われる。

(鈴木淳一牧師)